

# モスクワにおける現地理解教育への取り組み

前モスクワ日本人学校 教諭

静岡県浜松市立広沢小学校 教諭 藤岡 政哉

キーワード：現地校との交流、英語教育、現地理解

## 1. はじめに

近年、ロシアは急速な経済発展により、物質的に豊かになった反面、格差の拡大、民族間の対立などにより、現在のモスクワの治安状況は必ずしも安定しているとは言えない。特に都市部では、外国人を狙った強盗事件やスリ、置き引き、詐欺、クレジットカードやキャッシュカードのススキング犯罪等が多発しており、日本人も多く被害に遭っている。また、ナショナリズムの高揚を背景に外国人排斥主義的な風潮も見られ、日本人を含む外国人、特にアジア・アフリカ系の人々が若者の集団から暴行を受ける事件が発生している。薬物に絡む犯罪や銃器等を使用した殺人等の凶悪事件も多発している。また、モスクワ市内をはじめ、ロシア各都市において反政府集会やデモが行われている。特に無許可の集会・デモでは、逮捕者が続発している。

そのような状況のため、日本人学校に通う子どもたちは外を自由に出歩くことはなく、常に守られた空間の中で生活をしている。学校に通うときは、日本人学校運営のバス通学や保護者の送り迎えの車での登校が主な手段となるので、日本人の子どもたちはロシア人と気軽に接したり、ロシアの生活文化に触れたりする機会はとても少ない。日本人学校に通う子どもたちの多くは、ロシアに生活していても、日本人に囲まれて生活しているのである。

しかし、日常生活の中でロシア人の方と接すると、普通にあいさつをしたり、時には優しさに遭遇したりすることがある。そこで現地理解をしていく上で、一番大切なことは現地の人と直接関わったり、文化等に触れたりしていくことであると考えた。ロシア人と積極的に関わることでニュース等では知ることのできない体験をすることができると考えた。

## 2. モスクワ日本人学校での研究について

モスクワ日本人学校は、昭和42年10月2日に開校した小中併設校である。ヨーロッパで最初にできた日本人学校である。困難をきわめていた在ソ日本子女教育時代から、関係者の努力により40余年の間幾多の変遷を経て今日に至っている。

現在モスクワ日本人学校の「めざす子ども像」として次の3点が掲げられている。

- ・モスクワのすばらしさを自ら学び、体験することに喜びをもつ子ども
- ・異なった文化・生活環境をもつ外国の子どもと積極的に交流する子ども
- ・外国語に興味・関心をもち、意欲的に取り組む子ども

子どもたちが生活するモスクワとそこに生活する人々について理解を図ることが何より大切であると感じ、個人として研究させていただいた。子どもたちが異なる文化に接した際に、偏見や誤解を持たず正しく理解することのできる人間であってほしいと考えた。民族固有の文化を尊重しそれを育んだ人々を尊重することこそ、国際理解を深める重要な基盤である。そのためには、教師自ら現地を理解するように努めたり、交流する相手校に進んで話し合いに行ったりする姿勢が大切であると考えた。

### 3. 現地校との交流

教育現場でロシア人と積極的に関わることのできる体験として現地校との交流がある。モスクワの1239番校とモスクワ日本人学校とは25年来の交流を行っている。1239番校は基本的には地域の子どもたちが通うが、卒業生（祖父母、父母の代）の子どもたちも通っている。校長先生は、経営者であり学校独自の特色を出すことが求められている。児童・生徒の質は良く、数学、ロシア語、科学のレベルは特に高いということだった。

教育目標は「高い知識をつけ、どんな厳しい状況でも社会に役立て、生きていけるような子どもを育てる」こと。その結果としてロシアにも貢献できると考えられている。ソ連時代では、学校を卒業したら仕事とアパートがもらえたが、今は自分の力で生き残らなければならない。知識や教育内容は時代によって変わるが、高い知識を子どもたちに身につけさせることで、どんな状況でも生きていけると考えられている。また、他民族、他宗教、他者を尊重する教育も実践されている。「日本語のクラブ」もありモスクワ日本人学校と交流を進めている。その学校の職員や子どもたちと関わったり、現地の学校を見学したりすることは、現地の教育事情を深く知ることができ、また私自身の世界観も広がると考えた。また、モスクワの人は自己主張をしっかりとしたり、子どもたちに対してとても優しい面を見せたりするときがある。それは、学校以外の施設などでも地域の教育力が高く子どもを大切にしているからだと思った。多くの実地調査をすることでモスクワの教育事情と日本との違いを肌で感じてみたいと考えた。

また、今後の日本の教育の方向や自分自身の指導方針を改善する上で大いに役立つと考えた。

#### (1) 1239番校の英語の授業について

学校はオリジナルのカリキュラムに基づき授業を行っていた。2年生（7歳）から45分、週3回の英語の授業が始まる。テキストはロシアで作られた英語のテキストのシリーズを使用していた。アルファベットや文字と音から始まりPEN, ZOO, HOMEなどのトピックから成っている。学習内容の定着度はTOEICやTOEFLではなく、学校で作ったテストでレベルを評価していた。日本でも、小学校高学年における英語教育が行われているが、すでにロシアでは小学校の低学年から英語教育（外国語教育）が行われていた。会話中心の授業かと予想していたが、実際にテキストを見せていただくと読む、書く、文法などたいへんレベルの高い内容であったように思った。家庭での予習なしでは授業についていけないということを、1239番校の先生に教えていただいた。実際に見学させていただいた際に1239番校の子どもたちと英語で会話をしてみると、高学年ではほぼ全員が親切に答えてくれた。低学年でも、こちらがロシア語を理解できないと分かると笑顔で英語で話してくれた。

#### (2) 英語でコミュニケーションした道徳の授業実践

1239番校との話し合いの結果、平成22年度から「学習による交流」を行うことになった。前年度まで、主に日本の文化や遊びを紹介する活動をしてきたが、子どもたちにとってお互いの学校の学習を交流させることで、より深い交流ができるのではないかと考え実践をした。授業を行う上で、私がT1、相手校の先生がT2として授業を行うことになった。何度も打ち合わせをして、指導案を作り授業に臨んだ。ロシアでは、道徳の授業はなく教会の日曜学校や両親に教わるということを1239番校の先生から教えていただいた。相手校の先生も道徳の授業をすることは初めての経験でとても楽しみにしていた。

私が担任した6年生は道徳の授業「ロレンゾの友達」でディスカッションを行った。物語の3人の登場人物の考えに対して、自分の意見を持ち、「賛成」「反対」の立場に立ち話し合いを行った。授業の中では、日本人、ロシア人の子どもたち共に英語やロシア語で伝える場面もあり、言語の学習の成果にもつながった。担任の私もロシア人の子どもを相手に、日本の授業をしたことは初めての経験だった。ロシア人の子どもたちの考え方を聞いていると、道徳的な心情がしっかりと育っていると感じた。通訳を介さず直接日本人の



子どもたちに気持ちを伝えたい場合は、ゆっくり分かりやすい英語で話をしてくれる子もいた。

若い世代を中心にロシア人の中には、英語を流暢に使う人が多いように感じた。これから次世代を担う子どもたちにとって、国際社会では英語はコミュニケーションをする上で必要不可欠であるということを実感した。ロシア人、日本人の子どもたちもまた、英会話でコミュニケーションをする場面が授業の中で多くみられた。ロシアでは小学校で外国語の選択授業があり、英語、日本語、ドイツ語、フランス語などの選択肢があるということも聞いた。コミュニケーション能力の向上を図る取り組みとして「国際化」を先取りしているロシアの教育体制は優れていると感じた。

### (3) 英語で意思疎通をしたチェスの授業の実践

平成23年11月に1239番校へ子どもたちを引率して出掛けた。そこでチェスの授業を一緒に行った。今回は私がT2として授業に参加した。日本とロシアでは、学習指導計画が異なっているが、授業の中でチェスの授業が位置づけられていることに驚いた。日本の小学校では国語科・算数科を筆頭に、およそ10科目くらいを必修科目として学習が進められているが、海外では学習形態の大きく異なる国も少なくない。ロシアに近い黒海とカスピ海の間に位置するアルメニアの小学校でも、チェスを必須科目としたということを知った。チェスの授業の導入により、柔軟で分別のある考え方を教えることができ、それが知能発達を促すことが期待されているということを知った。1239番校の先生に教えていただいた。また、情報教育の一環として子どもたちにパソコン等の情報機器の操作も熱心に指導をしていた。

授業の導入では日本国内でもよく使われる電子黒板を使い説明をしていた。使っていたテキストがロシア語だったため、日本人の子どもたちが理解できるように優しく英語で授業をしてくれた。児童が実際に考えたチェスの動かし方を映し出し、操作、説明を加えることで、意欲や集中力を高め、理解度を深める効果もあったと教えていただいた。

「up」「down」「right」「left」「checkmate」等簡単な英語を使い優しく指導してくれたことで、子どもたちも集中して授業に取り組めた。何よりチェスが好きになった子が多くいた。



## 4. 地域の見学施設を実地調査して

### (1) モスクワ市内

3年生の担任のときに社会科で「モスクワ市内」や「地域のスーパー」、「おかし工場」などに見学に出かけた。3年生の社会科の学習では、国内とほぼ同様の教育を実践することができた。「モスクワ市内」の学習では、バスに乗り市内の大型幹線道路を走り、車内見学をしながらモスクワ市内の見学をした。最終的に「赤の広場」や「ワシリイ寺院」を目的地として社会科見学を行った。ここでは、ロシアの他の学校の見学者も歴史等を学習するために来ていた。社会科の授業は比較をすることで学習の深まりをみせる。モスクワという国内とはかなり違う環境にいる子どもたちにとって、日本の土地の様子や道路、古くからある建造物などをロシアのものとは比べることで生きた学習につながった。

### (2) スーパーマーケット

学校の近郊にある「メガツェントルイタリア」という店で見学をさせてもらえた。店内の様子はもちろんパンの製造所や精肉所等の見学もすることができた。日本国内のスーパーマーケットと同じで、品物によって温度管理をしていたり、リサイクルコーナーもあったりした。店長さんに話を聞いたところお客さんが喜んでくれるようにアンケートなどをとり、日々研究しているということだった。お店の工夫は、日本のスーパーと同じことが多く、国内同様の学習を進めることができた。

### (3) お菓子工場

モスクワの工場見学は充実していて、大変人気があるため、調整に時間がかかった。現地の学校も見学によく来ていて、学習に励んでいるということだった。オフィスに通されると、見学者は全員、作業衣と頭にかぶるネットを渡され、身に付けた。次に見学コースに沿っての見学が始まった。お菓子の甘いにおいが立ちこめる中、型に入れる機械の様子などを観察した。スタッフの体制も整っていて解説もしてくれたので、作り方や作る上での工夫もよく分かった。最後に、スタッフの方に多くの質問をさせていただき、学習のまとめをすることができた。工場見学についても日本国内同様の学習を実践することができた。モスクワの学校の教育に対する熱心な姿勢に感心した。

#### ○実地調査の考察

見学できる施設が充実している印象を強くもった。それは、次のような理由からである。

- ・見学の内容が充実していること
- ・団体のための施設も整っていること
- ・施設見学を行う学校が多いこと
- ・土産や体験コーナーの充実など、保護者や地域へのPR体制が整っていること

今回の調査で、モスクワは見学施設が充実していて、実際に多くの学校で施設見学を実施していることが分かった。地域の教育力が子どもたちの成長に大きな影響力を与えていると感じた。その意味で、モスクワの教育体制は優れていると思った。

## 5. おわりに

モスクワの教育事情を調査して感じたことは、「子どもは宝だ」ということだった。英語教育に力を入れていたり、学校や地域が協力して子どもたちを教育していこうとしたりする、強い姿勢を感じるすることができた。国を挙げて国際社会に通じる人間を育てようとする体制が整っていると思った。

1239番校との交流を3年間にわたり進めてきた。相手校の先生と話し合い、ロシアや日本の詩の交流や社会科の研究発表などをお互いに交流したいという意見も出た。ロシアの教育は未知数だったが、話を聞いていると日本と類似性があり、優れている点があるように感じた。

ロシア人の子どもたちは流暢に英語を話せる子が多くいる。レストランやスーパーマーケット等でロシア語が話せず苦勞していると、英語で通訳をしてくれたことが何回もあった。年配の方は英語が通じないときが多いが、若い方を中心に英語を話せる方が多くいることに気がついた。貿易大国であるロシアにとって国際化は重要なことであり、国を挙げて語学力にも力を入れていることを切実に感じた。1991年12月25日ソビエト連邦崩壊後、ロシアとなり日々進歩を積み重ねている。6年生の道徳の授業のときにも、互いのコミュニケーションは英語が多かった。モスクワ日本人学校の子どもたちも日々英語活動には力を入れていて、コミュニケーションをとっていたが、今後英語というのは国際社会に生きる子どもたちにとって、より一層世界共通語となると感じた。

モスクワ日本人学校は小中一貫校だった。私は研修主任という仕事を与えていただき、多くの指導案検討や小・中学部の授業を参観させていただき感じたことがある。小学部で研修テーマであった「コミュニケーション能力の育成」から中学部の研修テーマであった「人間関係能力の育成」において小中一体となった研修を進めることができた。小学校教育で始まった英語教育についても、小中教員の連携により教育効果を上げることができた。小学校を卒業してから中学校に入学した子どもたちの変容を見取ることができることで、学習面においてより効率的・効果的な環境であると感じた。モスクワの現地校においても小中一貫校が多く存在した。何より子ども同士の理解が深まり信頼関係に基づいた社会性を身に付けることができていたことを感じることもできた。

モスクワ日本人学校で現地理解教育を進めるにあたり、多くの保護者、現地スタッフに協力していただきながら児童生徒の安全が確保され、有意義に学習できたことに心から感謝している。3年間の経験で学び得たことをこれからの教育活動に活かして努力していきたいと思う。